浪漫主義文学研究

片岡良一著

片岡良一（かたおか りょういち）

1897年　神奈川県に生まれる。
東京大学文学部国文科卒業。
法政大学教授として在職中，
1957年3月25日死去。

主　著　『近代日本の作家と作品』
『夏目漱石の作品』
『近代日本の小説』
『浪漫主義研究』
『自然主義研究』

日本浪漫主義文学研究　定価 1200円

1967年5月20日　改訂増補版第1刷発行

著　者　片岡良一
発行者　相島敏夫
発行所　法政大学出版局
東京都千代田区富士見2-15-3
振替・東京95814番

乱丁・落丁の場合はお取り替えいたします。
印刷・三和印刷　製本・市川製本

目　次

はじめに　片岡良一

第一章　前浪漫主義の人々とその周囲

第一節　近代日本文学成立の契機　5
第二節　悲劇的作品の氾濫　13
第三節　悲劇の典型をめぐって　24
第四節　探求の限界　41
第五節　狂飆時代の端緒　56
第六節　逃避的傾向への逸脱　72

第二章　尾崎紅葉と幸田露伴

第一節　出発期の紅葉　91
第二節　西鶴への関心　105
第三節　開眼から一応の円熟へ　120
第四節　後期の動揺と紅葉作風の尊ぶべき基調　150
第五節　前期の露伴　170
第六節　後期の露伴　191
第七節　周囲への瞥見　208

第三章　浪漫主義の成立

第一節　浪漫主義の諸特質　220
第二節　北村透谷　242
I　思想的立場と平和論　242

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

Ⅱ　文学論史上の位置　258
Ⅲ　作家としての世界　271
第三節　透谷の周囲と同時代の人々　294
Ⅰ　文学界の人々　294
Ⅱ　同時代に出発した人々　308
第四章　浪漫主義の展開
第一節　「瀧口入道」と高山樗牛　330
第二節　泉　鏡　花　335
第三節　一九〇一年前後の文学　350
Ⅰ　重大な転換期　350
Ⅱ　明治初年以来の歴史への瞥見　351
Ⅲ　浪漫主義思潮を中心に　363

Ⅳ　前期自然主義と社会主義小説　370
あとがき　片岡懋

はじめに

日本近代文学に於ける浪漫主義の成熟期は明治三十年代初葉であるが、それに先駆する動きは、二十年代初葉の近代文学成立期に求めることが出来る。それ故、まず最初に二十年代初葉の作家と作品についての、一通りの具体的な研究成果を提示するところから筆を進めて行きたいと思う。

だが、これが既に二十年代初葉の作家と作品とを中心としての研究なのである以上、ここに記述されたものの前に、新時代の文学として維新以来二十年間のそれがあったのであることは、云うまでもない。多くの文学史家によって、明治前期とか、啓蒙時代とか称ばれている時代のことだが、私は、それを後者のように称ぶのが一番妥当だと思っている。それを人々が新しく近代的な思想や物の見方を出来るだけ身につけようとし、事実また或る程度までは身につけた時代であったと見、そういう時代の特質をはっきりと表示するには、そういう称び方が最も適当だと思うからである。

ところで、本文にもその点多少は触れて置いた通り、そういう啓蒙時代二十年間の思潮とか文学とかいうものの流れは、まず明治初年の福澤諭吉や中村正直から十年代中葉の自由民権論者中江兆民などに至るまでの、いわゆる啓蒙思想家たちの活動にはじまるとともに、翻訳文学の氾濫から政治小説の成立流行にと向うかたわら、いわゆる新体詩の誕生などをも迎えるところまで行っていたのであった。見方によってはそこに近代日本文学の成立があったとも云えるのである。

また事実そうした翻訳文学や政治小説の流行につれて、新しく近代風な物の考え方が強く文学の表面に押出されて来るとともに、それまでの文学界の主な潮流であった戯作文学――江戸末期以来の伝統に立った戯作文学は漸次に影のうすいものになって、文学一般がもっと真面目に人生の事実に相渉ろうとするようになり、そこから本文中にも触れて置いた「婦女の鑑」などにもつらなるような、問題と作者の積極的な対人生の主張とを盛りこんだような作品が、比較的多くあらわれるようになったのであった。それだけ文学意識も変ったわけだし、そこに近代文学の誕生を見るのも決して失当とは云えないのである。

が、それにもかかわらずそれらの新文学は、まだ近代文学としての中枢的理念である写実主義とは関知せず、手法的にも近代文学らしい革新を経ていなかった。つまりその新文学性に於てまだかたわだったのである。だからそれは題材や一応の形式に於て新時代の文学らしい性質を見せたのでありながら、まだ新文学としての魂が入りきらぬような趣を残していたのであった。そういう点への反省から、坪内逍遙の「小説神髄」を中心とした写実主義理論の提示となり、並行的に言文一致確立への努力が生れて、そこではじめて新文学を形成すべき要素が一通り出そろわされることになったのである。それらのものの意義が重く見られねばならぬ所以だが、そういう中でも逍遙の「小説神髄」は殊に劃期的な意義を持つものであったために、しばしばそれが新時代文学の「暁鐘」だったとも云われているのである。そうしてそれは一応は正にその通りであったのだが、然しそう云ってもそれはまだ理論的にかなり大きな不備を残していたものであったのみならずそれが政治小説などに対する反省――それもかなり反撥的な反省から生れたものであったために、せっかく政治小説の獲得した人生社会の重大問題に相渉るという新文学としての重要な性質などをまで、知らず知らず拒否してしまうような結果になったのであった。

それがせっかくの写実主義の提唱を、逍遙自身必しもそれを意識したのではなかったまでも、人世社会の重大事とは相渉らない、その意味で戯作的な末梢写実のそれにと傾かせてしまったのであった。だから彼自ら「小説神髄」の理論を実践して見せようとした「一讀三嘆 當世書生氣質」はその表題そのものが既に或る程度それを示している通り相当色濃い戯作性を孕んだものになってしまったのであった。翻訳文学や政治小説によって一応克服された戯作性が――古めかしい遊戯文学の伝統が、こうして新しい文学理論の提示と手をつないで、また或る程度復活して来ることになったのである。それだけ、新しい理論やそれを生かすべき新しい手法の一応の提示はありながら、ほんとに旧殻を脱ぎつくした新しい文学は、この時代にはまだ生れ得なかったのである。そう思うと、それは暁鐘であるよりもやはり新時代神を身につけようとする啓蒙的努力の一つ――それの大きな成果の一つだったと見るのが、最も妥当な見解になるのであろうと思う。政治小説が新文学としてまだ熟しきれなかったと同じように、この時代に提唱された写実主義理論やその理論によって生れた作品の群にも、まだ近代文学にはなりきれない不熟さが多かったのである。ほんとに新しい近代文学は、そういう二つのもののそれぞれに残されていた旧いものを乗り越して、その二つのものを云わばも一つ高いところで止揚したところに、はじめて成立したと云うことになるのである。私が、上記のようなものの出た頃までを新文学成立期以前の啓蒙期だと考えている所以だが、それはとにかく、そういう脱けきれないものを脱ぎつくし、成就しにくいものを成就しつくすために、こうして多くの人々がいろいろに努力した二十年の歴史があって、その間には幾度ものつまずきや時には後もどりのようなものさえあった上での、二十年代初頭に於ける近代日本文学の一応の成立があったのであることを、正しく知らねばならぬのだと思う。

こうして二十年代初葉に一応成立した近代日本文学は、その後、浪漫主義の時代、自然主義の時代等を経て、明治末年から大正期に入って、はじめてその成熟期に入るのである。

片岡良一

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

第一章　前浪漫主義の人々とその周囲

第一節　近代日本文学成立の契機

日本の近代文学は明治二十年代初葉に成立した。

それにはむろん当然の理由があったので、第一の理由としては新しい資本主義社会組織の一応の整備がまずあげられなければならない。武士家禄制度の廃止や土地私有権の確立によって、確実に資本主義的社会への基礎を置かれたわが国は、維新以来不断に続けられて来た政府の誘導と商工者流の努力とによって、重工業の発達こそ未しかったものの、軽工業中心の産業革命はこのごろまでにようやく一通り整備されるところまで来たのだという。だから歴史家のうちには明治維新の完成はだいたいこの二十年前後にあると説く人々もあるのだが、それはとにかく、文学は元来その時代や社会状勢との関連に於てあるものなのだから、こうして新しい社会の状勢がとのってみると、おのずからその新しい状勢を反映した作品が生れ出て来ずにはいなかったのである。近代日本文学が此期に於て成立したのも、そう思えば極めて必然の現象であったことが、容易に理解されるところであろうと思う。

のみならず、維新以来二十年の歳月を閲している間に、近代風な物の考え方や感じ方も、或る程度は人々のうちに根を下ろしていたのである。それが内から表現を求めずにいなかったところに、おのずから近代風の物の考

え方を軸とした作品を誕生させる契機があったとも云えるのである。それが云うまでもなく此期に於ける近代文学成立の第二の理由であった。

ところで、一口に近代風な物の考え方といっても、それはむろん多岐多様で、かんたんには要約出来ぬけれども、その中枢にあったものは何と云っても人間個人を尊重する思想だった。並行的に、その人間の住む現実の世界や人間の営む現実の生活を尊ぶ思想だった。そうして、そういう思想と対応した文学上の方法としては、いわゆる写実主義の方法があった。人間や現実を尊んで、これを写すに足る価値ありと思うところに成立する方法である。

そういうことを知るために、此期より少し後の作品にはなるが、とにかく島崎藤村の「浦島」（明治三十四年「落梅集」所収）という詩を調べてみよう。

「浦島の子とぞいふなる
遊ぶべく海邊にいでて
釣すべく岩によりて
長き日を糸垂れ暮す

流れ藻の青き葉蔭に
隠れ寄る魚かとばかり
手を延べて水を出でたる
うらわかき處女のひとり

名のれ〳〵奇しき處女よ
わだつみに住める處女よ
思いきや水の中にも
黒髪の魚のありとは
かの處女嘆きて言へる
われはこれ潮の児なり
わだつみの神のむすめの
乙姫といふはわれなり

龍の宮荒れなば荒れね
捨てゝ來し海へは入らじ
あゝ君の胸にのみこそ
けふよりは住むべかりけれ」

亀を助けたその酬いとしてというような道徳的勧懲的な特質は影も残さずぬぐい消されて、そのかわりに端的な恋愛感情が織り込まれていることその他、周知の通りの浦島の物語とは、ずいぶんちがった性質が見出されるだろう。そこに此詩のもつ近代文学的性格があるわけだが、云ううちでも特にここで注意したいのは、「龍宮城の歓楽」などという仙境観念乃至異郷思慕の思想があとかたもなくなって、そのかわりに現世尊重の現実主義的傾向がほの見えていることである。「わだつみの神のむすめの乙姫」が、人の子浦島とともに生きることを願う

て、「捨てゝ来」た龍宮の荒れ廃ることなど、全然意に介しまいとしているのだから。何ものをも越えてこの現実の人生を尊び、従って現実の生活に価値を見出している気もちが、そう思えばそこに必しもおぼろげでなく打出されているのであることが知られるであろう。と同時に龍宮を極めて「よいところ」として描いている伝説や物語では、「わだつみの神のむすめの乙姫」は彼女が神(或は仙女)であるが故に、どうやら人間浦島より上位のものであるかに扱われているのに対して、ここでは彼女は浦島にすがりついて、その悶えを訴えるような、そんな位置におとされているかたちが見られるだろう。人間を絶対とする思想がおのずからそういう作為を生ませるので、そういう特質を持った作品の生れているところに、近代が人間とその営む現実の生活乃至人間の住む現実の世界を何よりも尊んでいたかたちが、はっきりと知られるのである。

だから、そういう特質を持った作品は、何も藤村や「浦島」にのみ限られていたのではなかった。「浦島」よりさらにも少し後の作品であった森鷗外の「玉篋兩浦嶼(たまくしげふたりうらしま)」(明治三十五年)をみたまえ。これは二幕からなる戯曲だがその第一幕のはじめは、龍宮城の歓楽と刺戟のない平穏さとに倦み果てた浦島が、たいくつのあまり居眠りをしてしまっているところから書き起こされている。その居眠りの間に、昔漁夫であった時の自分があらしにあって難儀した時の様子を夢にみた浦島は、そうした緊張と自然征服の喜びを持つ人間(現実)生活こそ生きがいあるものだと感じて乙姫の恩愛をふりきって故郷に帰ることになるのである。

「たいらかなるにも　やすきにも
　ほどもこそあれ。　わがむねの
さばかり悶え　もだえしは

この平和にこそ　よりつらめ。
さきに風波を　ゆめみしとき
身うちの血潮沸き返り
気も晴々となるほどに、
ひごろのうたがひ　やぶれしぞ。
色も香もある　おことを棄て、
ここのみやゐを　たちさらんは、
こころぐるしき　かぎりなれど、
おことは自然　われは人
おことは物の　おのずから、
　成　る　をよろこび、　われはまた
ことさらに事を　爲　さ　ん　とすれば、
ふたりのこころは　合ひがたし」

これは「浦島」の場合よりも少し複雑な思想を含んでいるけれども、それにしても、浦島が龍宮の歓楽などより現実の人間生活の方が少なくとも人間にとっては生がいのあるものだと考え、そういう考え方から龍宮など棄ててかえりみまいとする気もちを示している点では、「浦島」と同断、もしくはより以上にはっきりしたものを示していると云えよう。こういう浦島の決意をどうすることも出来ず、乙姫は玉手箱に別れの涙を封じこめて泣く泣く別れることになるのだが、こうした傾向も立場もはっきりちがっていた二人の作家に、同じような考え方

があらわれているところに、それが単なる個人の特殊な思想傾向ではなく、その時代の人々一般に共通な感じ方であったことが、おおよそには理解されるのではないかと思う。人間の現実の重視が近代文学の中枢的な思想であったことが、こういうところからはっきりと断定されるのである。

然もその後者――「玉篋兩浦嶼」に於ける玉手箱の扱い方には、伝説や物語に於けるそれの扱い方とは、非常に異ったもののあることが知られるだろう。伝説や物語に於けるそれは、その中に何が入っているのか、しまいまでわからぬことになっている。そういう何が入っているのかもわからぬものを、浦島に最後までありがたそうに持ちつづけさせたあげく、いざとなってその箱をあけてみたら、中には何にも入っていなかった。ただそこから一筋ゆらゆらと立ちのぼった細い煙が、たちまち浦島を腰も立たぬ爺さんにしてしまったなどというのは、如何にも人間浦島を馬鹿にした扱い方であると同時に、その何かわけのわからぬものがふしぎな力を発揮するところに或る面白さを感じさせようとするものである点で、はっきりと神秘主義的な興味につらなる作品構成法――技術なのであることが知られよう。それに対して、「兩浦嶼」の場合には、玉手箱に封じこめられたのは乙姫の涙――まことであり愛情なのであることが、はじめからわかっているのである。そうしてそれがわかっていればいるほど、浦島がこれをだいじにかかえているのが尤もに思われ、反対に彼がこの箱をそまつになど扱っていたら、それだけで彼が人間のまことや愛情の尊さを知らない朴念人なのだということが、すぐ理解されるようになっているのである。写実主義の手法とは要するにそういうものなので、それは何かわけのわからぬもののふしぎな力に目をそばだたせたり、そこから何が出て来るかに興味や期待をかけさせたりするようなものでなく、実体の既にわかっているもののありがたさなり美しさなり、或は反対につまらなさなり下らなさなりを、出来るだけ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com